

---

**勉強？ しなくていいんじゃない？ ??ダメです**

六花 烈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勉強？しなくていんじゃない？ ??ダメです

### 【Nコード】

N9174R

### 【作者名】

六花 烈

### 【あらすじ】

さてさて。作者二人で勉強について語ってみましたよ？

烈「六花さんは、勉強できる方ですか？」 六花「できないことはありませんけど、できるわけでもないはずですよー」 烈「勉強は大事ですよー。将来に幅がきますからね」 六花「大事だとわかってるからつてしたいわけでもないですけどね！(´・`・´)」  
烈さんはどうですか？」 烈「え？ 僕？ やだなあ、できるわけないじゃないですかー、ははは……」 六花「そうですか？放課後

に教室で友達に教えてそんな感じがしますw」 烈「どこからそんなイメージが!？」 六花「相談されやすいタイプという延長でw」 烈「あ、でも、あながち間違つてないですよ。放課後は教室に残つて勉強を教えられてるんですよー」 六花「でも教室に残つてわいわいやつているのならどちらも同じようなものです!w」 烈「相談はされますよー。勉強以外! 勉強以外ね! そうですね、教室に残つて、出していない宿題を先生とかいう人の前で静かに解いてますよー。羨ましいでしょーw」 六花「www 宿題は出さないと後が大変だったりしますよねー」 烈「本当に。人生とは厳酷な物です……」 六花「残酷なのは人生というより宿題を出す先生ですね! (こら)」 烈「まさに!」

こんな作者ですが科目の擬人化、少しは勉強も好きになるかも??

胸？大きい方がいんじゃない？　　？？後二年もすれば！

照りつける太陽は、先月の中旬くらいから急にその勢いを強くしたように感じる。その周りに漂う雲は、平和な日常を表すかのよう  
にふわふわと浮いていた。

六月、初夏のグラウンドには少年少女たちの声が響き渡っていた。  
四時間目は体育。男子はサッカー、女子はハンドボールにそれぞれ別れて体を動かしていた。両の試合も終了するかという頃、見計らったように鐘の音が鳴る。

それぞれが「終わったー」や「あの時さー」と口々に話しながら教室や食堂へ行く中で、一際はしゃいでいる子がいる。

「やぱりさ、水着は際どいのがいいよね！」

日焼けして少し茶がかつたツインテールを揺らしながら、ぴよんぴよん飛び跳ねるように歩いている。英語ちゃんだった。

英語ちゃんが後ろ歩きしつつ話しながら廊下を歩いていると、不意に誰かにぶつかつた。

「あつ、すいませ……現国先輩！」

そこには、小さめの英語ちゃんよりは大分大きい、ツンツン髪で茶髪の少年が立っていた。現国くんはぶつかつてきた英語ちゃんを見て、さわやかな笑顔を浮かべた。

「よう、英語ちゃん！」

右手を軽く上げ、明るい挨拶を試みせる。英語ちゃんも「よう！」と軽いノリで返答してみた。英語ちゃんとその先輩の親しそうな様子に、英語ちゃんと話していた友達は「先行ってるね」と言つて、現国くんを気にする素振りを見せつつ離れていった。

「今から学食？……ってか、体操服じゃん」

現国くんは、英語ちゃんの服を眺めながら言う。

「今体育だったんです！　なにか文句でも？」

目を細くした英語ちゃんに、現国くんはにやりと怪しい笑みで返す。

「なんですか？」

英語ちゃんは少々不安そうな顔つきで問いかけた。

「いやあ、たいした問題じゃないんだけどさ、その服だと、ね？」

現国君の意味深な発言に「え？ え？」と慌てふためく英語ちゃん。その様子を見て現国くんは怪しい笑みを一層深める。

「だからほら、体操服だと、ぺったんこが余計に目だっ??？」

「ごん、という鈍い音がして、現国くんは胸を押さえた。そこには、英語ちゃんの頭が打ち付けられている。

英語ちゃんは頭を引く。

「うるさいですっ！ あと二年もすればナイスバデーなんですっ！」手をぶんぶん振り回しながら講義する彼女に、現国くんは苦笑いするしかなかった。

「はは、はにはっへふほ？」

不意に声を掛けられた現国くんは少しビクツとする。先生が来たのかと思ったのだ。髪を染めている現国くんは、なんだか先生たちに目の敵にされてるような、されてないような、なのだ。

彼がぎこちなく振り返ったその先には、高校一年生の数学さんがマシユマロを頬張っていた。

中高一貫校のこの学校では、中学と高校の校舎は渡り廊下で繋がっている。そのため、たまに中学の校舎にも高校生が来ることがある。中学生が高校の校舎に行くこともできるけれど、高校生が怖いのでまず誰も行かない。

数学さんは頬張っていたマシユマロを飲み込むと、「ごめんなさいね」と言っ、先程と同じ言葉を繰り返した。

「何やってるの？」

決して責めている口調ではなくて、純粹に何をやっているのか知りたいといった口調だ。

「聞いてくださいよー」

目に少しだけ涙を溜めた英語ちゃんが、身長差のある数学さんを見上げた。

「現国先輩が、ぺったんこを馬鹿にしてくるんです」

「いや、別に、馬鹿にしてるわけじゃないんですよ……？」

現国くんは引きつった笑顔を見せながら、少し後ずさりしている。「女の子の色気を馬鹿にするのはよくないんじゃないかな？ げん・こ・く・クン」

数学さんは自分よりも背の高い現国くんを、上目遣いにじっと見つめる。

現国くんの引きつった笑顔が余計ひどくなり、後ずさりも大きくなっていく。

ついに、回れ右をしてしまった。

そんな現国くんの学ランのすそを、数学さんがすかさず掴んだ。

「ごめんなさいは？」

笑顔ですごんでくる数学さんに、肩を震わせた現国くんは「う、ごめんなさいい」ときこちなく歩いていった。

「ところで英語ちゃん」

現国くんを見送ってから数学さんが英語ちゃんに向き直った。

「はい、なんですか？」

首を傾げる英語ちゃんに、数学さんは少し考えるふうにして言う。

「わたしはその小さい胸も可愛くて素敵だと思うんだけど」

「数学先輩……」

「あ、あんまり気にしないで。じゃあね」

ひらひらと手を振って、数学さんはマシユマロを頬張りながら高校校舎のほうへ歩いていく。

あとには、困ったような、不満そうな顔をした英語ちゃんが残された。

今日も平和だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9174r/>

---

勉強？しなくていんじゃないね？ ??ダメです

2011年10月6日17時45分発行